みささぎ
奈良大学図書館報
第20号
2014. 11

むかし読んだ美術書

文学部史学科　教授　図書館長　森　田　憲　司

人間の記憶なんてあてにならないもので、小学校時代に傍に置いてよく見ていた本でも、何十年も見ないでいると、頭の中で思い込んでいた内容とは違ってしまっているものだ。

現代教養文庫に『ルーブル美術館』(高階秀爾他編　1961）がある。小学校時代に見たこの本が、西洋美術についての私の知識の基礎となった。

いつの間にか行方不明になったらしく、長い間この本を目にすることはなかった。社会思想社自体が存在しないので、今ではこの文庫はない。

あれから、さまざまな美術全集を見た。印刷すっかり良くなった。しかし、この本にあった高階氏の「美術館案内」、つまりルーブルは広いので、有名な６点を見るだけで右往左往、１日がかりでやっとだ、という短い文章だけは、強く印象に残っていた。

だから、北京でやっている連載コラムで、いつか「一時間で見る国家博物館」というテーマで書こうと考えていた。天安門広場に面して建つ国家博物館（旧中国歴史博物館）は優品に満ちているが、なにせ広い。北京に住む日本の方たちとお話ししても、たしかに行ったことはあるが、というご返事が多かった。

博物館は、2013年には世界最大ともいう新展示になってオープンし、どうやら内容も安定してきた。名品揃いなのは変わっていないどころか、新出土品などの展示で内容はさらに充実した。それから何回か訪問したが、毎回飽きさせない。しかし、広すぎる。通史陳列（基本展示）の部分だけでもずいぶんな面積だか。ますます「１時間で見る」ガイドを書きたくなった。

たまたま、編集に参加している出版企画があったので、執筆リストにこのテーマを載せた。企画が実現すれば、やっと「１時間で見る」を書けるのだが、企画自体どうなるか。

このタイミングでブックオフの均一で『ルーブル美術館』を見つけた。もっとも、高階氏の文章のタイトルは記憶と違っていたし、内容にも若干記憶違いがあった。

美術関係の本などは新しい本が出ると見劣りのする古い本は見捨てられがちだ。古書市場での美術全集の値段は、少し時間のたったものなら恐ろしいくらい安い。とはいっても、印刷の仕上がりが見栄えしない、内容的にもいまどきではない、そうした昔の本であっても、必要なときには必要だ。個人はともかく、図書館というものは、そのような調査にも応える施設でありたいものだ。

2014年夏の図書館展示から　「光悦謡本」

奈良大学図書館は、昨年度に国の補助を得て光悦謡本（本阿弥光悦がプロデュースした謡の本）と呼ばれる、17世紀初頭に活字印刷で刊行された謡の本のヴァリエーション５種を購入しました。

そこで、2014年夏の図書館展示では、「アジアの活字本　光悦謡本を中心に」と題して、光悦謡本をメインに、日本、さらに中国や朝鮮の活字印刷本を展示しました。

日本では、1600年をはさんで、16世紀の終わりころから17世紀にかけての時期に、さかんに活字印刷がおこなわれました。これらは「古活字本」と呼ばれます。その背景にはキリスト教宣教師がもたらした西洋の印刷機の影響、朝鮮から略奪された活字の影響、などの諸説があります。

この時代、多数の活字印刷物が作成されましたが、なかでも本阿弥光悦のもとで作成された「光悦本」（嵯峨本）と呼ばれる一群の書物は、光悦が書いた版下を用いたとされる活字の美しさや、雲母刷（きらずり＝ウンモの粉を用いた印刷）を用いた下絵、さらには、用紙や装幀の洗練などで知られ、これらの書物を「日本で一番美しい印刷物」と呼ぶ人もいます。活字印刷と言えば一字一活字と思いがちですが、連続文字の活字も用いられていて、版面を美しくしています、

今回展示した光悦本は、

A「放生川」（表紙雲母刷、本文用紙雲母刷）

B「殺生石」、C「項羽」

（表紙雲母刷、本文用紙色違い紙）

D「松虫」（表紙雲母刷、本文用紙色違い無し）

E「春菜」（表紙雲母刷、本文素紙）

F「忠度」（表紙雲母刷、本文素紙、整版、史学科資料）

どの本も雲母を用いた模様が表紙に印刷されていますが、１葉ごとに色を変えた用紙に胡粉を塗ったもの（BC）、一葉ごとにも雲母で模様が刷り込まれたものなどから（A）、模様もない普通の紙（素紙）に印刷し袋とじされたもの（E）、さらには活字本をベースに版木に刻されて印刷されたもの（F）など、さまざまなヴァリエーションを見ることができます。

参考資料として、嵯峨本の最高傑作と呼ばれる『徒然草』の複製（1930）なども展示しました。

また、当時さかんにおこなわれた活字印刷（古活字版）の資料として、古典籍の実物零葉の貼りこみ帖『出版文化　古板本手鑑』（図書館蔵）から、なるべく有名な書物を選んで展示しました。

17世紀後半ころになると、印刷の主流は木版印刷（整版）になりますが、趣味的なものなど、活字を用いた印刷はその後も存続し、「近世木活字本」と呼ばれます。今回は『海国兵談』を展示しました。

あわせて展示した中国朝鮮の活字印刷については、紙数の都合で省略しますが、展示したうち『各種活字混合唐詩三百首』（史学科資料）は、巻ごとに活字の材料（木、銅、錫、磁器、素焼き）を変えて印刷したもので、サンプルとして作られたものとはいえ、各種の活字印刷方法の実例が見ることができる珍しいものです。

（もりた　けんじ）

図書館について思うこと

文学研究科
文化財史料学専攻　林　　哲　太

入学当初から、当大学図書館についてはたびたび利用してきており、多くの要望にも応えてもらい、大いに感謝している。現在勉強が出来ているのは、この図書館が自分の考えの基盤のひとつになっているように思う。院生となって、図書館のアルバイトを経験するようになり、更に深く図書館と関わるようになった。当大学の図書館は、蔵書も豊富であり、特に私のように歴史について研究を志しているものにとってはよい環境である。もともと当大学に進学した理由も、オープンキャンバスにて図書館をはじめて見学した時、その蔵書の豊富さにひかれたからでもある。

図書館のアルバイトをしているうち、本そのものについて更に細かく見ることができるようになった。本の種類は勿論、その形式・大きさ・材質などに気を配るようになった。図書館での業務は、いつも新しい本との出会いの場となっていることは、私にとって大きなことである。図書館の蔵書は約50万冊におよぶといわれ、中には歴史資料や貴重書も何点か含まれており、図書館のコレクションとなっている。一部は、図書館内の展示によってたびたび公開されており、わたしたちの目に入る機会も多い。

この度、奈良大学図書館は、大規模な蔵書受入れを行うことになり、そのための工事に追われている。直接かかわりあっているわけではないけれども、様変わりした図書館の内装をみるにつけ、感慨深いものがある。ただ、これによって当大学の蔵書が大幅に増えることになった。奈良大学は、考古系の調査報告書を数多く所蔵しており、これに６万冊近くものが加わることになった。この蔵書量は、他の大学にも類をみないものであり、大学の一つの長所として、大いにアピールできる点だと思う。このような財産を幅広く活用するために、図書館の活動にも広がりがみられるとよいと思っている。というのも、奈良大学は地域公開制度を設けており、所蔵資料を広く公開しているが、他大学との交流は希薄であるように感じるからである。図書館には、この点についてよりよい制度を作ってくれるように願っている。

勝手な感想を述べてきたが、あくまで図書館を利用するものとして、図書館の現在とこれからについて、自身の思うところを記したまでである。図書館を利用されるかたは、図書館の変化について、それぞれ考えるところもあるだろうが、この機会に、図書館の細かい点に少しでも気づいてほしいものである。もちろん、図書館がどういう場であると考えているかは人によってさまざまであると思うが、この期間に、図書館の隅々にまで、目を向けてみるのもよいかと思う。自身も、図書館の全貌について把握しているわけでもなく、図書館に足を運ぶたびに新たな発見があるように、気を配っていきたい。

図書館統計　＜2014年３月末現在＞

	平成24年度 (2012)	平成25年度 (2013)	増　減
開館日数	272	272	▲ 0
入館者数	120,049	118,674	▲ 1,375
図書所蔵数	437,729	448,663	10,934
（和）	395,991	406,415	10,424
（洋）	41,738	42,248	510
雑誌タイトル数	6,268	6,382	114
貸出総数	45,698	41,501	▲ 4,197
相互協力利用（依頼数）	358	313	▲ 45
相互協力利用（受付数）	1,049	881	▲ 168

図書館展示報告（平成25年度）

図書館展示室では平成25年度に、下記のテーマで企画展を開催しました。企画立案からパンフレット作成まで、全面的にご協力いただいた各先生方に深く感謝いたします。

今後も本学の特色を活かした展示を実施していきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

	回	テーマ	企画	会期
25年度	1	「奈良大学図書館所蔵の文化財修理報告書（平成23年度特別集書購入資料）」	西山要一教授 魚島純一准教授	４月１日～６月29日
	2	「古典籍と和紙の貼りこみ帖（平成24年度特別集書購入資料）」	東野治之教授 森田憲司教授	７月13日～９月21日
	3	与謝野晶子と「明星」の仲間たち	藤本寿彦教授	10月11日～11月16日
	4	近代日本の地図と書翰	小林丈広教授	１月10日～３月21日

後　記

図書館報「みささぎ」第20号をお届けいたします。

まず、企画展示ならびに原稿をご執筆いただきました文学部史学科　森田憲司教授（図書館長）、文化財史料学専攻　林哲太君には御礼申し上げます。

本年12月には、日本考古学協会からの受贈図書の第一弾が本学に届く予定です。日本考古学協会からの受贈図書受け入れ作業は３年におよぶ予定です。本学所蔵の調査報告書は、現在でも約８万冊を数えます。このコレクションが加わることで、「知の拠点」として奈良大学図書館の存在が際立つことと思われます。　（編集担当）

発行：平成26年11月20日
編集：奈良大学図書館　奈良市山陵町１５００